

「わあ。とっても甘いね。」

モモコは大きな口を開けて、ついさっきまで畑にあったスイカをおいしそうにほおぼりました。モモコにとって、かずこおばあちゃんを作るスイカは夏の一番の楽しみなのです。

モモコはそんな大好物のスイカを食べながら、去年の秋のことを思い出しました。

「よいしょ。よいしょ。忙しい。忙しい。」

夏が終わり、秋の風を感じはじめたころ、おばあちゃんは何だか忙しそうでした。庭の落ち葉を集めたり、いねかり後にできたわらをかんそうさせたりと、庭や畑でせっせと手を動かしていました。その様子をモモコはなわとびの練習をしながら、そっと見ていました。

冬の間到庭で集めた落ち葉を畑の穴の中に入れ、米ぬかやもみがらを混ぜて発こうさせたり、わらは納屋にきれいにならべられていました。

そして、桜がまう春になると、おばあちゃんは畑の穴の中をひんぱんに見に行き、何度も何度も混ぜていました。それはまるで、何か大切なものを見守るように。

（おばあちゃんは、穴の中で何か育てているのかな？）

（でも、あの穴の中に落ち葉をうめていたんだけどな？）

モモコはとても気になって、おばあちゃんに聞いてみると、

「これは、夏野菜の肥料なんだよ。土や落ち葉についているび生物の発こうする力をかりとかんきょうにやさしい肥料ができるんや。ほら、冬の間こんなになすがたを変えてまるで生きているみたいでしょ。」

穴の中をのぞくと、つんとしたにおいがして、落ち葉が、真っ黒い肥料にすがたを変えていました。

「これを畑の土に混ぜてあげると、土の中のび生物が喜んで、栄養たっぷりですっかり空気を含んだふかふかの畑になるんじゃよ。」

そういうとおばあちゃんは、天然の肥料をせっせと畑にまきはじめました。

「やわらかくなーれ。元気になーれ。」

と土に話しかけながら、肥料を混ぜていきました。冬の間にかんそうした土は、とても喜んでるようでした。

おばあちゃんは来る日も来る日もこの作業を続けモモコも一緒に手伝いました。モモコもだんだん畑の土がやわらかくなっていくのを感じ、

「おばあちゃん、土がどんどんやわらかく、ほかほかになっていくね。まるで私のお布団みたい。」というと、

「そうや。これは、モモコの大好きなスイカのお布団になるんよ。人間もスイカもふかふかのお布団でねると、よくねむれてよく育つんよ。」

と言って、二人で、まだ青々しているスイカの苗をふかふかの土のお布団の中にそーっと植えていきました。土は沢山の空気と栄養をふくんで、フワフワとスイカの苗を包み込みました。モモコは、夏に大きな甘いスイカができることを想ぞうすると、ワクワクしました。

「スイカの苗をふかふかに守ってあげてね。ふかふかお布団でのびのび大きくなーれ。」と二人は、土やスイカに話しかけながら毎日水やりをしました。おばあちゃんがかぜをひき、ね込んだときは、モモコが水やりを一人でがんばりました。もちろん土やスイカに話しかけることを忘れませんでした。

梅雨時期は、スイカが雨でくさらないように、たまっている水をかき出したり、少しでもかわいた場所へね床をうつします。

「こっちの方がふかふだよ。大きな、甘いスイカになーれ。」

ふたりは、まだ、テニスボールほどのスイカを少しでも居心地の良い場所へと置きかえました。

時折、スイカのしげみから青虫やカエルたちも顔を出し、二人の様子を見守りながら、スイカを囲んでみんなで大合唱をしている様でした。

日差しが強い初夏には、スイカが弱らない様に、納屋で保管していたわらをスイカ畑にしきつめていきます。やわらかい土のお布団の上に乗せるマットレスの様でした。

「わらをしいてあげると、スイカを暑さから守れて、大きく育つんだよ。天然のものは安心安全や。」

と、おばあちゃんからわたされたわらは、ほんのりいね刈りのこうばしいにおいがして、モモコは去年の秋にわらをかんそうさせていたおばあちゃんのすがたを思い出しました。

夏休みが始まるころ、いよいよスイカのしゅうかくの時期です。

畑には二十こ近くの見事なスイカが仲良くならんでいます。スイカも大きくなって、きゅうくつそうです。モモコの顔より大きいものが、何こもありました。

長年の、おばあちゃんの知えと工夫で、人工ではなく自然の肥料や材料を使ったことや二人で土やスイカに話しかけながらたつぷりの愛じょうを込めてお世話した努力の結果、りっぱなスイカができたことを実感し、むねがいっぱいになりました。

「これに決めた。」

モモコはボンボンと一番いい音がする大きいものを選び、半分に切りました。中から真っ赤でキラキラしているスイカが顔を出しました。

「すごい。まるで宝石みたい。」

とモモコは、おばあちゃんと一緒にがんばって育てた夏の宝石にかぶりつきました。